

八千代市村上地区の女人講石造物

蕨 由美

はじめに

八千代市の村上地区（下市場村を含む旧村上村）は、古代・中世からの水陸の交通の要所で、江戸時代には、この地域の中核的な村として中郷・宮内・宝喜作・辺田前と江戸初期に分村した下市場村の5つの集落、寺院は鎌倉時代の清涼寺式釈迦如来像を伝える正覚院とその末寺など真言宗系5カ寺、神社は七百豫所神社ほか大小多数の社祠を擁していた。（*2.）

したがってこの地区の石造文化財の数（*1.）も、月待塔・子安塔 71 基（市内 343 基）、庚申塔 51 基（市内 432 基）、参拝供養塔 68 基（市内 324 基）、馬頭観音 35 基（市内 311 基）、仏像供養塔 21 基（市内 144 基）と他地域に比べても多く、江戸時代から近現代にかけての庶民信仰や地域ごとの活発な講の存在を知ることができる。

本稿では、「八千代市石造文化財一覧表」（*1.）のデータを基礎に現地調査を行って確認した中から、月待塔・子安塔などの女人講に関連する供養塔 75 基を取り上げ、各地区および所在地別にその様相と特徴ある石造物を紹介する。

なお、本文の最後に、表「八千代市村上の女人講に関連する石造物一覧表」を載せた。本文の石造物のNo.は、この表のNo.を示す。像容・形状・銘文などはこの表を参照いただきたい。

1. 中郷（寺内・持田）地区の女人講石造物

・正覚院境内

正覚院境内には、十五夜塔 1 基、十九夜塔 8 基、子安塔 9 基、仏像供養塔 2 基の計 20 基もの女人講関連の石造物がある。中でも寛文 11 年（1671）銘の如意輪観音像塔（No. 1）は八千代市内初出の十九夜塔であり、また享保元年（1716）銘の地藏像塔（No.3）は市内唯一の十五夜塔であること等、この境内は八千代市内での女人講関連の石造物のまさに発祥の地と言ってよい。（この二つの石塔については、別稿「正覚院の寛文 11 年銘十九夜塔と享保元年銘十五夜塔について」P●をご覧ください。）

本誌前号の「八千代市萱田の石造物にみる女人講の姿」（*3.）で筆者は、二世安楽を祈願する男女別の講が共同で建てたとみられる長福寺の寛文 9 年（1669）三層塔と、延宝元年（1673）の飯綱神社下の庚申塔を、女人講の萌芽と推測される石造物の事例として紹介したが、正覚院の寛文 11 年銘十九夜塔は、「造立十九夜女人」の銘から十九夜塔の確立を告げる八千代市内初出の事例である。

宝永 5 年（1708）銘の供養塔（Fig.1 No.2）には、「十九夜」の銘はないが、像容が如意輪観音像であり、10 月 19 日銘の造立月日と「おせん おなつ おまつ おまん □ちよ

おつね」など女性名 15 名が台座に彫りこまれていることから、これも「十九夜塔」であろうと推定される。またこの如意輪観音像は一見、二臂像に見えるが、蓮華や法輪、如意宝珠を持つ 4 手を浅く浮彫りした六臂像である。北総では寛文期、六臂の光背型如意輪観音像が二臂像の数より多かったが、如意輪観音像の造塔が多くなる元禄期からは急速に減って、宝永以降ほとんど見られなくなる。この宝永 5 年銘の如意輪観音像の像容は、二臂像のプロポーションに六臂像の儀軌の名残を留めている点でも興味深い。



Fig.1 宝永 5 年 (No.2)



Fig.2 元文元年 (No.4)



Fig.3 宝暦 5 年 (No.5)

元文元年 (1736) の如意輪観音供養塔 (Fig.2 No.4) も「ヲツマ ヲカセ ヲハツ」など 13 名の女性名がカタカナで記されており、宝永 5 年の供養塔と同様な理由で、「十九夜塔」と推定される。

正覚院にはその後、宝暦 5 年 (1755)、明和 4 年 (1767 No.6)、享和 2 年 (1802 No.7)、文化 13 年 (1816 No.8)、如意輪観音像の十九夜塔が、「寺内」と「持田」の 2 地区共同で建てられている。

丁寧に彫られた宝暦 5 年 (Fig.3 No.5) の二臂如意輪観音像は、今も穏やかな表情がよく残っている。

享和 2 年 (No.7) の如意輪観音は、左手に大きな未敷蓮華を持つ。

文化 13 年 (Fig.4 No.8) は華麗に広がる衣の裾などに、化政文化の特徴を表す。



Fig.4 文化 13 年 (No.8)

正覚院境内の女人講石造物が、如意輪観音像塔が子安像塔に替わるのは、明治 16 年からで、「中郷 女人講」の名で昭和 51 年まで建塔されている。江戸後期から子安像塔が建てられている近隣の米本、萱田や大和田に比べて、村上地区はやや遅い。

明治 16 年（1883）の子安像（Fig.5 No.9）は、被布のように長く垂らした髪を頭頂で丸く結びあげた母像が、無心に乳を吸う丸々とした子を見守っている像である。

正面を向きでゆったりとしたこの像容は、明治 3 年から 26 年まで、船橋市・白井市・八千代市に 12 基の類型がある。（*4.）



Fig.5 明治 16 年 (No.9)



Fig.6 明治 39 年 (No.11)



Fig.7 昭和 4 年 (No.12)

明治 39 年（1906）の子安像（Fig.6 No.11）は、三角錐状の宝髻と U 状に舞い上がる帯状の飾り（垂髪？）、レンズ状の目が特徴で、明治期末から大正期末まで、下市場八坂神社など成田街道沿いに 13 基の類型がある。

昭和 4 年（1929）の子安像（Fig.7 No.12）は、明治 16 年（No.9）の像容の系譜をひく穏やかな像で、軟質材のわりに損傷が少ない。

昭和 51 年（1976）に建てられた子安像（Fig.8 No.18）は、宝髻を高く結びあげ、右手で子を抱き、左手は未敷蓮華と蓮の葉の二本の茎を持つ。子の右手が母像の左乳房をつかみ、左手に達磨を持つ。天衣が両肩



Fig.8 昭和 51 年 (No.18)

から背後に逆三角形に広がり、その裾が左膝の前に波打って下がる。この像と細部まで同一の像容は、明治十年代から印西市・旧印旛村・白井市・八千代市などに多くみられ、その数は筆者の実見したもので 43 基ある。まさに近現代を代表的する子安像で、村上では辺田前公民館の昭和 56 年（1981）の子安像塔（No.51）もこの類型である。（*4.）

また平成 11 年（1999）には、寺院が募った個人の寄進者により、大型の石造子安観音坐像（No.19）が奉納されている。

・郷土博物館入口の子安神社の子安石祠

正覚院の裏手の台地上、殿内の郷土資料館入口に、中郷（寺内・持田）地区の庚申塔群と子安神社（Fig.9）があり、神社の小祠内に延享 2 年（1745）「子安大明神／村上講中」銘の石祠（No.21）が、愛染明王の石塔とともに祀られている。

ここは近くには道祖神が祀られ、道標も置かれている古道の分岐点に位置する。

古道の分岐点に子安神が祀られる事例は多く、同様の立地にある上高野の子安神社には、千葉県内最古の元禄 16 年（1703）銘の子安神の石祠が祀られている。

村上地区ではこのほか、七百餘所神社には宝暦 9 年（1759 No.22）、下市場八坂神社には明和 7 年（1770 No.69）の「子安大明神」石祠、字立野台墓地には安政期の「子安大権現」石祠（No.41）がある。一方、子安観音像が村上地区に現れるのは、明治以降である。子安像塔に先行して子安神の石祠が、路傍や神社に祀られているのが、村上地区のように八千代市の古くから成立した村の江戸時代の子安塔の特徴である。



Fig.9 郷土博物館入口の子安神社

2. 宮内・宝喜作地区の女人講石造物

・七百餘所神社

宮内の七百餘所神社は弘安年間の創立と伝えられ、旧社格は村上村の村社であった。

境内に隣接した古墳上には、前項で触れた宝暦 9 年（1759）銘の「子安大明神」の石祠（No.22）が「講中三十二人」によって祀られている。この古墳は江戸時代に富士塚として信仰されていたと考えられ、コノハナノサクヤビメ（木花咲耶姫）を子安神とする富士（浅間）信仰との関連も類推される。

なお、境内には、明治 28 年（1895 No.23）と大正 9 年（1920 No.25）の自然石製の子安神文字碑と、明治 31 年（1889 No.24）と昭和 30 年（1955 No.26）の子安像塔 2 基が祀られている。このうち、明治 28 年銘碑は「宮内女人講」、大正と昭和の 2 基は、「宮内 宝喜作」の講の銘になっている。

・村上字宮山の女人講石塔群

七百餘所神社の向かい側の県道路傍に、馬頭観音塔などが雑然と集められている石塔群がある。梨業組合撰果場が塚であった頃、その塚に建てられていた石塔をここに移したとのことである。石塔群には、延宝 7 年（1679）の聖観音像塔のほか、如意輪観音像塔が 8 基、子安像塔 2 基など女人講に関連する石塔も多く、損傷があるものも多いが、いずれも優れた像容を留めている。



Fig.10 明和 3 年 (No.29)



Fig.11 寛政 11 年 (No.30)



Fig.12 明治 7 年 (No.33)

享保 8 年（1723 No.27）と寛保 4 年（1744 No.28）、明和 3 年（1766 Fig.10 No.29）の 3 基の如意輪観音像は、この時期には珍しい六臂像で、「二世安楽也」など銘文も古風で丁寧である。

寛政 11 年（1799）の如意輪観音像（Fig.11 No.30）は、大きな蓮華を持つ華麗な造りで美しい。

明治 7 年（1874）の子安像塔（Fig.12 No.33）は、軟質石で光背の上部を欠いているが、草むらに臥していたせいか、細かい彫りが鮮明に残っている。像容は、乳幼児が母の膝上に這い上がり、母は華やかに天衣を翻して左手に達磨を持ち、子の頬を右手で受け、子は右手に小さな未敷蓮華をもつ。

この子安像の像容は、江戸時代後期の天保十年代から船橋市・鎌ヶ谷市など北総西部に流行したデザインである。八千代市内では、米本長福寺に弘化 5 年（1848）の、島田台長唱寺に明治 31 年（1898）の優品が残っているほか、麦丸東福院や逆水薬師堂などでも、この子安像に類似した像容を見ることができる。

・字立野台墓地沿い路傍の石仏群

庚申塔・馬頭観音など宝喜作地区の石仏を墓地の塀際に並べてある中に、十九夜塔 3 基 (No.38~40) と子安石祠 (No.41)、建立月日から十九夜塔と推測される如意輪観音像塔 (No.37) の 5 基の女人講関連石造物、さらに「村上村／宝喜作女人」と刻まれた台座などがある。

享保 11 年 (1726) 銘の十九夜塔 (Fig.13 No.38) は、小ぶりながらも光背に天蓋を浮彫りし、基部に「おけさ おたね おせ□」など 14 名の女性名が刻まれている。

なお、これらの石塔は、宝喜作の子神神社の近くにあったといわれる正東院から移されたものと推測されている。



Fig.13 享保 11 年 (No.38) 字立野台墓地

3. 辺田前（両辺田）地区の女人講石造物

・根上神社古墳横の石仏群

国道 16 号線沿いのホームセンター脇の三叉路の角にあった石仏群が、近年道路整備などで、根上神社境内の裏手に移動し、庚申塔などの石造物が整然と並べられてある。

その中に、宝暦 12 年 (1762) 銘の如意輪観音像十九夜塔 (Fig.14 No.42) と、供養目的の銘はないが、十九夜塔と推定される寛政 4 年 (1792) の如意輪観音像塔 (No.43)、嘉永 2 年 (1849) 文字銘の駒型の十九夜塔 (No.44) がある。

これら 3 基を造立した講は、いずれも村上村の「両辺田」（両部田）となっている。

なお、根上神社の境内には子安神社があり、木製の祠の中に石祠が祀られている。銘文が明らかでないので、石造文化財としてリストアップしていないが、子安信仰の石祠であり、これも入れると 5 つの古い集落のすべてに子安神が祀られていることになる。

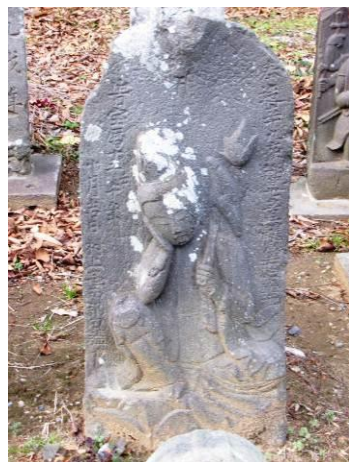


Fig.14 宝暦 12 年 (No.42) 根上神社横

・辺田前公民館

根上神社とは国道 16 号線を隔てた西側の浅間内の台地下に、辺田前公民館がある。延享 3 年 (1746) の「村上村明細差上帳」によれば、ここには宇那谷大聖寺末寺の真言

宗の蓮葉寺という寺院があり、その境内には観音堂もあったという。(*2.)

ここには、江戸時代の十九夜塔 4 基と明治以降の子安塔 6 基など、11 基の女人講関連の石仏が並んでいる。



Fig.15 安永 9 年 (No.45)



Fig.16 文化 13 年 (No.54)



Fig.17 大正 2 年 (No.48)

安永 9 年 (1780) の十九夜塔 (Fig.15 No.45) は、穏やかな顔立ちの如意輪観音像で、「両部田」の講中の造立である。

これに先立つ元文 2 年 (1737) の十九夜塔 (No.53) は、彫りは鮮明であるが如意輪観音の顔の部分に鋭角に剥落している。この石塔は、文化 13 年 (1816) の十九夜塔と、年不明の十九夜塔 (No. 55)、地蔵像塔などとともに、浅間内遺跡発掘調査により旧浅間内墓地の南側斜面の土中から発見された石仏で、近年ここに安置されたという。

文化 13 年の如意輪観音像 (Fig.16 No.54) も、重機で受けた損傷が無残であるが、白井市の文化 7 年 (1810)、船橋市の印内光明寺の文化 9 年 (1812)、同市正延寺の年不明の如意輪観音像十九夜塔にきわめて類似し、放射状に垂れさがるリボン状の冠帯や優しい顔立ち、右手に持つ蓮華などに共通する特徴があり、船橋市正延寺の年不明十九夜塔に文化年間の造立年代を与える好資料である。(*4.)

文政 3 年 (1820) の像上部が欠損した丸彫型如意輪観音像 (No.46) は、村上と萱田の「女人中」による供養塔で、両村の女性たちの交流を物語っている。(*3.)

子安像塔は、明治 17 年 (1884) 以降、平成 13 年 (2001) まで「辺田前」の女人講 (子安講) により、6 基建立されており、現代も建塔が続けられている。

大正 2 年 (1913) の子安像 (Fig.17 No.48) は、よだれかけをした頭が大きな子供に

乳を与えるふくよかな母子像である。このスタイルは、明治 19 年（1886）に船橋市八木が谷長福寺と八千代市吉橋寺台公会堂に現れ、明治 42 年（1909）下町白旗神社の子安塔（No.57）を経て、その豊満さの強調は、辺田前公民館の子安像塔で頂点に達する。栄養がいきわたったようなこれらの母子像は、明治の終わりから大正期にかけて富国強兵を背景に『産めよ増やせよ』の時代であったこと、また宗教的な因習を排し、母子保健に力が注がれた時代であったことを象徴しているといえようか。

このタイプの子安塔は、大和田新田字庚塚の昭和 9 年（1934）まで、白井市・船橋市・八千代市に地域に 21 基が分布する。（*4.）

昭和 56 年の子安像塔（No.51）は、1.の正覚院の項で記したように、正覚院の昭和 51 年子安像塔（No.18）に類似する近現代の代表的な像容である。

4. 成田街道沿いの町場の女人講石造物

・下町白旗神社

成田街道と国道 16 号線の交差点に位置する神社で、明治 20 年（1887 No.56）から昭和 20 年代（No.58）まで 3 基の子安像塔がある。（「八千代市石造文化財一覧表」（*1.）では、No.56 の「明治 20・2・吉」を「昭和 20・2・吉」、No.57 の「明治 42・3」を「昭和 42・3」と誤記）

このうち明治 42 年（1909）の子安像塔（Fig.18 No.57）は、辺田前公民館の大正 2 年（1913）の子安像（No.48）に先立つ類型である。



Fig.18 明治 42 年（No.57）

・台町稲荷神社

明治 19 年（1886 No.59）から昭和 32 年（1957 No.61）まで近現代の 3 基の子安像塔が、近代以降の庚申塔と並んで建てられている。

台町と下町は、成田街道の発達とともに発展した新しい町で、両神社境内の石造物は、子安塔のほか、庚申塔、馬頭観音などすべて近代以降の造立である。

5. 旧下市場村の女人講石造物

・下市場 字北側の石塔群

成田街道沿い八坂神社隣の大洋鯨の向かい側の坂を上ると、笠付の「三界萬霊塔」が入口に立つ中村新左エ門家の墓地があり、かつてここには阿弥陀堂があったという。



Fig.19 下市場 字北側の石塔群

その墓地の北側路傍に石塔群 (Fig.19) があり、如意輪観音像の十九夜塔 4 基 (No.62 ~64.66) と、銘が不明の如意輪観音像塔 2 基 (No.67.68)、天保 14 年 (1843) の文字銘「十九夜観世音」石塔 (No.65) ほか、天保 6 年 (1835) の二十三夜塔と二十六夜塔 (両方とも文字塔)、地藏像塔 (年不明)、庚申塔などが並んでいる。

これらはすべて江戸時代の石塔と思われ、近代以降と確定できる石塔はない。

・下市場 八坂神社

成田街道の古道分岐点にある八坂神社は、境内社に木花開那姫命を祀る浅間神社と金刀毘羅神社、道標を兼ねた天保 11 年 (1840) の庚申塔や馬頭観音塔があり、さらに本殿右の塀沿いに、江戸時代の子安石祠 1 基と、明治以降の子安像塔 6 基が建立年順に整然と並べて祀られている。



Fig.20 明和 7 年 (No.69)



Fig.21 昭和 8 年 (No.73)



Fig.22 平成 12 年 (No.75)

この中で「子安大明神」の石祠 (Fig.20 No.69) は、明和 7 年 (1770) の銘がある。 (「八千代市石造文化財一覧表」(*1.) では、「明和七／庚寅／年」を「昭和 7 年」と誤記)

他に天保 2 年 (1831) の道祖神も祀られていることから、ここもまた、上高野や郷土博物館入口の子安神社のように、古くから分かれ道に立地する子安信仰の場であったことが推測される。

明治 42 年 (1909) の子安像 (No.71) は顔部分が崩落しているが、その像容の特徴は、正覚院の明治 39 年 (1906) の子安像 (Fig.6 No.11) と類似し、大和田新田を中心に成田街道沿いに流行した像容である。(*4.)

また、昭和 8 年 (1933) の子安像 (Fig.21 No.73) の像容は、八千代市と佐倉市隣接地に分布する昭和前期の代表作で、大和田円光院や上高野字上谷津台、下高野福蔵院にも

このような豊満で華麗な像を見ることができる。(*4.)

なお、最新は平成 12 年 (2000) の最近流行の白御影石の子安観音立像 (Fig.22 No.75) で、「子安講中」による建立である。今も子安講が続けられているのか、今後、注目していきたい。

おわりに

旧村上村とその分村である下市場村の女人講に関連する石造物を、地域別に整理してその信仰資料としての変遷を追うことにより、近世から現代までの村上地区の歴史的特徴や信仰実態が概観できたかと思う。

特に正覚院と江戸時代まであったその末寺を信仰生活の中心にしていた北部の集落では、江戸時代初期から八千代市域でも先進的に女人講が組織され、寛文 11 年 (1671) の十九夜塔 (No.1) や、享保元年 (1716) の十五夜塔 (No.3)、字立野台墓地沿い路傍の延宝 6 年 (1678) の如意輪観音像塔 (No.37) などとその足跡を残してきた。

また明治以降、十九夜講は子安講に替わり、成田街道に沿った新しい町を含め、どの地区でも多数の子安像塔を建塔しているが、これらの像容は、八千代市内外に流行したものの多く、地域的なつながりを推定できる。(*4.)

さらに、子安石祠の記年銘とその立地を考察することにより、江戸時代にも念仏主体の十九夜講とは別系の子安神を祀る基層信仰が集落ごとに存在し、明治以降、神仏分離によって子安像塔を祀る子安講に再編されていく姿も把握できた。

石造文化財は、現在も道路拡張や境内整備の危機にさらされている。幸い「八千代市石造文化財一覧表」(*1.) に記録された女人講関連の石造物はすべて現認できたが、2011 年 3 月の地震の影響で損傷を受けたものも多く、特に近代以降の軟質石材の子安塔は、風化による石面の剥落やカビによる銘文の不明瞭化が懸念される。

今後、市民の歴史探訪の際などに、このレポートが、これら石造文化財の意味を知り、地域への関心を深めていただくことの一助になれば幸いである。

- *参考資料 : 1. 『八千代市の歴史 近代・現代Ⅲ 石造文化財』2006.3 八千代市
2. 「村上村明細差上帳」『八千代市の歴史 資料編 近世Ⅰ』1994 八千代市
3. 「八千代市萱田の石造物にみる女人講の姿」蔵由美 『史談八千代』
第 36 号 2011 八千代市郷土歴史研究会
4. 「北総の子安像塔 =江戸時代末期から現代までの様相について」
蔵由美『房総の石仏』第 22 号 2012.7 房総石造文化財研究会

八千代市村上の女人講に関連する石造物一覧表

正覚院

No.	種類	像 容	造立年月日	西暦	形 状	銘 文
1	十九夜塔	如意輪観音	寛文 11.10.19	1671	丸彫型	造立十九夜女人 念仏講衆為菩提 也 村上村道師 池證山鴨鴛寺
2	供養塔	如意輪観音	宝永 5・10.19	1708	光背型	おせん おなつ おまつ おまん □ちよ おつね (他女性名 9名)
3	十五夜塔	地藏菩薩	享保元・11・24	1716	光背型	奉造立十五夜念仏 おいわ おい □ おつる(他多数)
4	供養塔	如意輪観音	元文元・10・19	1736	光背型	㊦奉道立如意輪観音二世安楽也 ヲツマ ヲカセ ヲハツ (他 10名)
5	十九夜塔	如意輪観音	宝暦 5・10・吉	1755	光背型	十九夜 寺内持田講中 三十三人
6	十九夜塔	如意輪観音	明和 4・10・19	1767	光背型	㊦奉納十九夜講中 三拾五人
7	十九夜塔	如意輪観音	享和 2・11・吉	1802	光背型	十九夜 村上村持田寺田講中 三 拾三人 二人
8	十九夜塔	如意輪観音	文化 13・2・吉	1816	光背型	㊦持田 寺田十九夜講中
9	十九夜塔	子安観音	明治 16・4・吉	1883	光背型	十九夜 世話人 川嶋新五郎 寺 内持田講中
10	十九夜塔	子安観音	明治 27・12	1894	光背型	㊦十九夜 女人講中
11	子安塔	子安観音	明治 39・3・19	1906	光背型	㊦女人講中
12	子安塔	子安観音	昭和 4・1・19	1929	光背型	㊦女人講中
13	子安塔	子安観音	昭和 16・2・19	1941	光背型	中郷 女人講中
14	子安塔	子安観音	昭和 24・3	1949	光背型	㊦中郷 女人講中 世話人川島重 徳 川島利雄 (他 2名)
15	子安塔	子安観音	昭和 33・3・吉	1958	光背型	㊦中郷女人講中 世話人川島喜一 川島清 (他 2名)
16	子安塔	子安観音	昭和 42・3・	1967	光背型	中郷 女人講中 世話人川島源一 川島一雄 川島□と 川島さと
17	子安塔	子安観音	昭和 43・3	1968	光背型	中郷 女人講中
18	子安塔	子安観音	昭和 51・3・吉	1976	角柱型	中郷女人講中
19	子安塔	子安観音	平成 11 年	1999	光背型	子安観世音
20	十九夜塔	文字	不明		駒型	十九夜講

郷土博物館入口

No.	種類	像 容	造立年月日	西暦	形 状	銘 文
21	子安塔	文字	延享 2・11・	1745	石祠	子安大明神 村上講中

七百餘所神社

22	子安塔	文字	宝暦 9・11・5	1759	石祠	子安大明神 寄者講中三十二人
23	子安塔	文字	明治 28・11・23	1895	自然石	子安大神 宮内女人講
24	子安塔	子安観音	明治 31・12・吉	1889	光背型	㊦子安観世音
25	子安塔	文字	大正 9・10・吉	1920	自然石	子安神社 宮内 宝喜作 女人講中
26	子安塔	子安観音	昭和 30・4	1955	光背型	子安 宮内宝喜作講中一同立

字宮山

27	十九夜塔	如意輪観音	享保 8・	1723	光背型	奉建立如意輪尊像 為二世安楽也 □九夜講村上村同行□□乃至□□ 平等利益
28	十九夜塔	如意輪観音	寛保 4・2・19	1744	光背型	奉造立十九夜講中為二世安楽也
29	十九夜塔	如意輪観音	明和 3・□・19	1766	光背型	□造立十九夜観音 □□安楽也 下総国印旛郡村上村講中善女人
30	十九夜塔	如意輪観音	寛政 11・11・吉	1799	光背型	村上村宮内十九夜講中
31	仏像供養塔	如意輪観音	文政元・11・吉祥	1818	光背型	㊦奉造立如意輪観世音
32	仏像供養塔	如意輪観音	文政 5・11・吉	1822	光背型	奉造立如意輪観世音
33	子安塔	子安観音	明治 7・1・吉	1874	光背型	セハ人 宮崎あさ 山崎志□
34	十九夜塔	如意輪観音	(元禄カ)		光背型	□九夜同行
35	十九夜塔	如意輪観音	(嘉)永 3・10・吉		光背型	十九夜 観世音
36	子安塔	子安観音	不明		光背型	

立野台墓地

37	仏像供養塔	如意輪観音	延宝 6・10・19	1678	光背型	(人名多数)
38	十九夜塔	如意輪観音	享保 11・10・19	1726	光背型	奉納十九夜講中二世安楽 おけさ おたね おせ□ (他 11 名)
39	十九夜塔	如意輪観音	明和 7・	1770	光背型	㊦奉造立拾九夜観世音壹体宝喜作
40	十九夜塔	如意輪観音	文化 12・11・吉	1815	光背型	十九夜塔 宝々作講中
41	子安塔	文字	安政□・□・□		石祠	子安大権現

根上神社横

42	十九夜塔	如意輪観音	宝暦 12・10・吉	1762	光背型	奉造立十九夜観世音一体為二世安楽也 村上邑両部田講中
43	仏像供養塔	如意輪観音	寛政 4・11・吉	1792	光背型	㊦ 村上村両辺田講中
44	十九夜塔	文字	嘉永 2・10・吉	1849	駒型	十九夜塔 両辺田中

辺田前公民館 (No.53～55 は、字浅間内墓地付近の発掘調査による持ち込み)

45	十九夜塔	如意輪観音	安永 9・10・吉	1780	光背型	㊦奉造立十九夜講中両部田廿九人
46	仏像供養塔	如意輪観音	文政 3	1820	丸彫型	村上 萱田 女人中 (像頭部欠損)
47	子安塔	子安観音	明治 17・1・19	1884	光背型	女講中 セハ人 村上邨辺田前植田吉太郎(他多数)
48	子安塔	子安観音	大正 2・2	1913	光背型	辺田前 女人講中
49	子安塔	子安観音	昭和 8・4・吉	1933	光背型	辺田前 女人講中
50	子安塔	子安観音	昭和 32・4・19	1957	光背型	子安講一同 辺田前
51	子安塔	子安観音	昭和 56・4・吉	1981	光背型	女人講中 辺田前講中一同
52	子安塔	子安観音	平成 13・3・吉	2001	光背型	女人講中
53	十九夜塔	如意輪観音	元文 2・11・吉	1737	光背型	奉納十九夜講中二世安楽祈所 おくに おせん(人名多数)
54	十九夜塔	如意輪観音	文化 13・3・吉	1816	光背型	□九夜講中 四十七人
55	十九夜塔	如意輪観音	不明		光背型	十九夜

下町 白旗神社

56	子安塔	子安観音	明治 20・2・吉	1887	光背型	子安 當村女講中 世話人 宮崎弥助 山崎善之助(他 9 名)
57	子安塔	子安観音	明治 42・3・	1909	光背型	女人講中 世話人 杉山雄吉 山崎武助
58	子安塔	子安観音	昭和 22・		光背型	子安講中 寺沢ハル 岩井ミツ 大菅トミ(他 12 名)

台町 稻荷神社

No.	種類	像 容	造立年月日	西暦	形 状	銘 文
59	子安塔	子安観音	明治 19・11・吉	1886	光背型	當村 岩井□ 同たけ (他 13 名) セハ人岩井弥□
60	子安塔	子安観音	大正 10・3	1921	光背型	子安講 セハ人杉山栄太郎(他 15 名)
61	子安塔	子安観音	昭和 32・3	1957	光背型	子安講 セハ人荻原誠喜 荻原栄脩(他 19 名)

下市場 旧阿弥陀堂

62	十九夜塔	如意輪観音	宝暦 11・11	1761	光背型	奉造立十九夜講中二十三人
63	十九夜塔	如意輪観音	文政 2・2・吉	1819	光背型	奉造立十九夜女人講中
64	十九夜塔	如意輪観音	文政 13・2	1830	光背型	□奉成就 □九夜女人講中
65	十九夜塔	文字	天保 14・2・吉	1842	角柱型	㊦十九夜観世音
66	十九夜塔	如意輪観音	文久 2・3・19	1862	光背型	十九夜 當村世話人 賀藤三左エ門 杉山長右エ門
67	十九夜塔	如意輪観音	□ ・□・吉		光背型	□夜講中
68	仏像供養塔	如意輪観音	子・2・吉		光背型	

下市場 八坂神社

69	子安塔	文字	明和 7・10・吉	1770	石祠	□安大明神
70	子安塔	子安観音	明治 18・2・19	1885	光背型	子安観世音
71	子安塔	子安観音	明治 42・3・吉	1909	光背型	㊦女人講 セハ人 鈴木磯二 須田喜□(他 19 名)
72	子安塔	子安観音	大正 10・3	1921	光背型	子安講中 (人名 74)
73	子安塔	子安観音	昭和 8・3・吉	1933	光背型	㊦子安講中 世話人須田郡司 杉山正明(他 10 名)
74	子安塔	子安観音	昭和 32・3	1957	光背型	子安講 加藤もと 杉山徳子(他 18 名)
75	子安塔	子安観音	平成 12.7.吉	2000	光背型	子安講中 (人名多数)

種字 ㊥＝キリーク (如意輪観音・阿弥陀如来・千手観音など)、㊦＝サ (観世音菩薩)、㊧＝ア (大日如来)